

小中学校の児童、生徒に多くの患者が出た原因とされた。学校給食はまだやっていなかったから食べ物からではない。各地区の発生は生徒の媒介によるものとされた。

早速、保健所が来て全村検便と消毒を行うことになった。役場の担当はもちろん、地区の衛生委員（後の衛生部長）も呼び出されて手伝うことになった。しかし、衛生委員自身も赤痢にかかった人も多く、なかなか手がなくて困ったという。

お尻だけ出して一列に

保健所は泊まりがけで夜を徹して検査した。後に衛生指導員になった佐々木喜一郎さんは、当時衛生委員をしていたが、早速呼び出されて検便を手伝った。村民みなお寺に集まってもらって、便をとって菌の培養検査をするのだが、そのやり方がいっぷう変わっていた。

一列に並んでカーテンからお尻だけ出して並び、検査者がガラス棒をお尻の穴へ突っ込んで便を採取し、シャーレに塗るのである。番号で処理し、カーテンで区切られているので、顔も名前も分からないが、今だったら人権問題になるかもしれない。

全村に赤痢が発生したということもあって、保健所の命令も強制的だった。とても恥ずかしいなどと言っておれなかった。

役場も赤痢発生にびっくりして、当時の衛生主任の間島誠さんや、学校を卒業して就職した

ばかりの井出今保健婦さんも、殆ど每晚幻灯機を持って地区を巡回し、伝染病予防の話をして回った。

各町村には「避病舎」という名前の、いわば隔離病舎が設けられていたが、穂積村では高岩地区にあった。患者は順次その避病舎に収容されたが、たちまちのうちにいっぱいになり、ついに病棟の廊下にまであふれ出る始末であった。そこで、三ヶ四力所の公民館にも分けて患者を収容した。

その後、患者は千曲川をはさんで、畑八村へも移り、昭和二十九年には上畑地区で二十四人、三十年にはまた穂積村で百十八人の発生があった。

相次ぐ赤痢の発生に、当時の野沢保健所の防疫係は、後になって次のように記している。「もう少し公衆衛生に対する知識があつたら、こんなことにはならなかつた。防疫のために我々が現地へ行つて見てみると、村から川の水は使わないようにといくら言われても、平気で使っているし、手洗いは、造っておかなければ文句を言われるからと、申し訳的に造っておき、実際は殆ど使用した様子はなかつた。

いちばん驚いたことは、高岩地区で、夕食用のそうめんをゆでて、川で冷やしていたお婆さんがいたことで、これにはいささかあきれた。(後略) (穂積公民報・三十年八月二十日号)

基本的には、村民の衛生知識の不足が原因とされた。

このような状況の中で、穂積村と畑八村は合併して八千穂村が発足した。井出幸吉氏を村長に新しい第一歩を踏み出したのである。

環境衛生指導員を置く

八千穂村にとって、この赤痢大発生は大事件だった。その教訓を生かして二つのことがなされた。

一つは簡易水道の建設だった。それ以前にも八郡区や筆岩区にはすでに出来ていたが、赤痢発生を機会に各地区で次々と簡易水道がつくられた。従来は申し訳的な消毒装置が多かったが、維持管理を完全にするという保健所の指示で、その点にも力が入れられた。

これがやがて、佐久地区全体に上水を供給する佐久水道の建設（昭和三十五年竣工）へと発展していくことになる。

もう一つは、昭和三十年になって環境衛生指導員というものを県環境衛生連合会の指示で人口千人に一人置くことになったことである。これは八千穂村だけではなく各町村でも同じだった。八千穂村では人口は六千人程度だったが八人置くことにした。それだけ力を入れたのである。

他の町村では環境衛生指導員をおくことには、あまり乗り気でなかった。区長が兼ねてやる

とか、名目だけのものが多かった。しかし八千穂村では違った。赤痢発生の経験で、みな地域の衛生環境を良くし、伝染病の予防に力を入れなければという気持ちが強くなっていた。

結局、専任の環境衛生指導員をおいて積極的に取り組んだのは八千穂村だけだった。赤痢大発生が村の意識を大きく変えた。後に彼らは環境衛生面だけでなく、成人病予防も担当する衛生指導員として、全村健康管理発足の際には大いに活躍することになるのだが、赤痢発生がその土台をつくったといえる。

まさに赤痢さまざまであった。

ハ工退治と回虫駆除が最初の仕事

ハ工の習性も利用して

赤痢大発生が契機となって、昭和三十年に、八人の専任の環境衛生指導員が選ばれたのだが、大半が二十歳代の青年たちだった。

といっても役場の常勤職員ではない。ふだんはそれぞれ自分の仕事を持っていて、ある人は農業に、ある人は自営業に、ある人は会社勤めに精を出している。時期に応じて環境衛生の仕

事を、それぞれ分担の地区を受け持つて行うのである。

環境衛生指導員の第一の仕事は、伝染病予防のために、まずハエを駆除することであった。ハエの多いところはまず便所である。便所は外便所で、今と違って「溜め」の周りはコンクリートでなく土だから、そこにハエが卵を産んでサナギができる。放っておくとそれからウジが生まれる。春早いうちに冬眠中のサナギを土ごとかき取って、新しい土と入れ替えるのである。

もちろん指導員だけでは、とても全戸はできないので、地区の衛生部長さんにも指導していっしょに実施してもらおう。そのあとハオルソ剤（有機塩素剤）という殺虫剤を一戸一戸散布して歩くのが指導員の役目だった。

牛小屋もハエの多いところだった。指導員の井出守さんは、ハエ退治の変ったやり方を考えた。牛小屋の入り口に繩のれんを張り、のれんに殺虫剤を撒くというやり方である。ハエは低いところは飛ばない。高いところを飛ぶので、のれんに一回とまってから牛小屋へ入る。出てくるときもそこへとまってから出てくる。そういうハエの習性も利用した。

もちろん牛が入りするときには、殺虫剤のついたのれんをくぐるので背中に薬剤が付く。そこで背中にハエがとまると死ぬ。しかし人間が触るとあぶない。牛小屋の出入りには注意が必要だった。

もう一つ、薬剤を使わないハエ退治の面白い方法があった。ご飯を炊いておかまを置く。そ

こへワツとハエが集まって真っ黒になる。そこで麦藁に火をつけてパツと被せる。ハエは一斉に焼けて死んでしまうというのだ。

日頃の実践結果を発表

ノミ退治には床下消毒をやった。これは主に粉剤でDDTを撒いたという。器械でものすごい勢いで噴出するので、下手をすると体じゅう浴びてしまう。殺虫剤散布もなかなか危険な作業だった。

環境衛生指導員が消毒に力を入れたおかげで、その後赤痢の大発生はなくなったが、他の伝染病も含めて散発的に一年に数件程度の発生はあった。その度に指指導員は呼び出されて、患者の家はもちろん近所周辺まで、消毒を繰り返して歩くのだった。

年齢が若かったこともあって、指導員たちは研究熱心だった。毎年、県の主催で環境衛生大会というのが長野や松本で開かれたが、それには全員で参加し勉強した。その佐久地区の研究発表会が海ノ口の和泉館で開かれたときに、井出守さんが研究発表を行った。テーマは「便所のハエの駆除について」である。

日頃実践していることを発表すればよいので、それは難しいことではなかったが、会場からは質問が相次いだ。どんな消毒方法でやっているのか、散布器具はこのメーカーのものか、

どこで買ったか、値段はいくらかなど、具体的な質問が多かった。他の地区では、あまりそういうことはやっていなかったらしい。大会へ出てみると、八千穂村が相当進んでいることが分かった。

回虫が鼻からニユーツと

ハエの駆除とともに、環境衛生指導員が力を入れたもう一つの仕事は、回虫の駆除であった。検便の手伝いと、駆虫剤を配って歩くことである。

当時は回虫卵保有者は村平均で五〇%を超していた。時々回虫を口から吐き出すことは珍しくなかったが、たまには回虫が鼻からニユーツと出てきて皆をびっくりさせた。腹痛で病院に入院し、手術を受けて、初めて原因が回虫によるものと分かった人もいる。

回虫が多かったのは、下肥を直接畑へ撒いたからである。家族の誰かが回虫を持っていれば、下肥には必ず回虫卵が含まれる。それを肥桶で汲みだしてそのまま畑へ撒くものだから、当然野菜にその仔虫がついてしまう。その野菜を食べてまた感染する。悪循環だった。

寄生虫には回虫だけでなく鉤虫（十二指腸虫）も多かった。村平均で数%もあった。これはひどい貧血を起こすので、病院での治療が必要だった。

そこで寄生虫の検査が始まったのだが、検査は上田の寄生虫検査所に頼んだ。まだ全村健康

管理が始まる前のことである。

検便には、マッチ箱を利用して便を提出してもらった。それを集めるのも指導員の仕事だった。ところが村の人は真面目だから便をたくさん取ってくる。マッチ箱一杯に詰めてくる人もいる。だから便の匂いが部屋中に広がって臭くてとても大変だった。

回虫の駆虫には海仁草（マクニン）を主に使用した。薬は役場で用意して保有者にはただで与えたから、村の人は大人も子どもも進んで便を提出した。

環境衛生指導員は保健婦と協力して、各地区を回って回虫予防の映画をやりながら、検便や駆虫剤投与を精力的に行なった。そのとき下肥を生のまま撒かずに野溜をつくって熟してから撒けという指導もした。しかし野溜をつくったのは大きな農家だけで、一般の農家はとてもそんな余裕はなかった。

みな貧しい時代だった。

ヤギ・トリ・大豆で栄養改善

赤痢がきっかけで栄養改善

「あの頃はみんな貧乏だった。俺の家は昭和二十七年から魚屋をやっていたが、魚なんて誰も買わない。菜っぱとみそ汁が当たり前の食事だった。今じゃ竹輪なんてごちそうじゃないが、これさえ盆と正月くらいしか食わなかった」と、初代衛生指導員会長になった山浦虎吉さんは語る。

村の保健婦として長年活躍していた井出今さんは、「私はちょうど穂積に赤痢が大流行した昭和二十八年に役場に入ったけれど、その赤痢で穂積の女衆が目覚めちゃったんです。赤痢にならない体力をつけるために、栄養をとらなくちゃあと、穴原の内藤よしえさんたちが工夫して、みんなが集って大豆で豆腐をつくって分け合う『お豆腐の日』を始めたんです。そして、若妻会で食生活改善講習会などをよくやりました。そして昭和三十二年に保健所の『栄養改善指定村』を受けることになって、これが栄養グループに発展したんです」と、栄養グループ誕生のいきさつを語ってくれた。

さらに、佐口の衛生指導員だった井出佐千雄さんも、「そう、俺たちの部落にも、栄養グループの篠原てる子さんたちが指導に来てくれていたが、赤痢にならないために栄養が大事だと、環境衛生指導員だった俺たちも、頑張ってPRしたんだ」という。

なんとこの栄養グループも、赤痢が発端で始まった住民の活動が原点にあったのだ。

ナベ・カマ持参で伝達講習

役場衛生係の間島誠さんや井出今さんも栄養改善の指定村としての活動に力を入れた。栄養グループは、各地区の婦人会から二、三人ずつの代表が参加し、総勢五十人にもなった。毎月一回保健所の栄養士による調理講習が行われ、ここで習った知識や料理法を、各人が持ち帰り、地区ごとに伝達講習をして回るのである。公民館に鍋・釜を持参で苦勞もいとわず皆ががんばった。

会員一人あたりの材料費は三十円で、各自が負担するところや、婦人会で負担してくれるところといろいろあった。みんな比較的ひまはあったので、伝達講習の連絡を出すと、公民館の調理室がいっぱいになるほどで、にぎやかによく集まった。現代のようにまだプロパンガスという、ハイカラなものもなく、コンロと炭、鍋、まな板、包丁と、材料からすべてを籠に入れて背負い、会場に向いたものだった。

グループの中心的な牽引役だった横森幸子さんは、「料理も終わって試食会の後は、みんなで楽しく歌ったり踊ったり、今考えとずいぶんのんびりしたものだった」と当時の様子を語っている。

実際、子ども連れで集まるのだから、ワイワイがやがや賑やかで、できたそばから子どもが食べたがり、大人の分をまた作ったりして楽しかった。マヨネーズの作り方もよくやったと、

今でも懐かしく語るグループ員が多い。

ずっと後のことになるのだが、昭和三十七年の全国栄養法施行十周年記念大会で、八千穂村栄養グループが厚生大臣賞をいただくことになる。

食糧難のなか、畑からとれる手近かで栄養価の高い大豆を使ったこと、協同で自家用豆腐を定期的につくって分け合うこと、冬にはこれを凍み豆腐にして、一戸に五箱ずつ作り、農繁期の保存食にまで利用したことなどの、すばらしい実践が注目されたのである。

山羊の飼育と鶏五羽運動

やがて代表十二名の研究グループもでき、年間の活動計画やテキスト作成、栄養実態調査もやった。栄養調査は無作為抽出の三十戸について、みんなで一週間の調査をして歩いたが、その結果は野菜とタンパク質不足・塩分過多がはっきりした。

そこでグループは、豆腐だけでなく動物性のものもと、全戸に山羊の飼育を推進する。

濃厚飼料を必要とせず、草だけで栄養価の高い乳を出す山羊は、当時大いに注目されだしていた。

わが国唯一の山羊牧場（現在の長野種畜牧場）が近くにあり、山羊を飼うのを村の条例にしたほどで、どこの家も毎日の草取りは子どもの仕事、管理は男の役だった。この山羊乳が乳幼

児の栄養をかなりカバーしたと思われる。

さらに、卵を売るだけの養鶏ではなく自家用にも卵を食べようと、栄養グループは「鶏五羽運動」を提案する。村中でやるところに意味があり、これで多少は卵が人々の口に入ったらしい。

鶏については今でも思い出すことがある。後に私どもが全戸訪問を計画して、下畑集落を回っていたときのこと。カンカンと石をたたくような、かん高い音がするので行ってみると、真っ赤な血が石から滴たっていて、おじさんが何かをしきりにたたいている。手でもケガしたのかと驚いて聞くと、「鶏をつぶしたから、骨をたたいて団子にしているんだ」という。盆に客が来るからとのことだった。

庭の石にじかに肉片を置いて、金槌でたたいているその大らかさ。初めて見る光景のすごさに驚きつつも、非農家だったわが家の暮らしにはない豊かな行事食で、農村のたくましさを感じ、印象深い思い出として残っていたのだが、あれが鶏五羽運動だったのかと、ずっと後になって思い当たった。

村ぐるみの健康管理は昭和三十四年から始まったのだが、これよりずっと早い段階から、住民自ら健康づくりを考え、村民全体を視野に入れた活動が始まっていたのだった。環境衛生指導員と栄養グループの組織が、健康をまもる牽引車の両輪となって、道を切り開いていったと

いえる。

悲しい現実——結核とねたきり

入院の第一位は結核

環境衛生指導員たちは、主にハエ、カの駆除とか、赤痢など急性感染症の予防のために、環境衛生に取り組んでいたが、人体の病気には直接手を下すことはなかった。これはあくまでも保健婦や看護婦の仕事だった。

その中で、当時の農村の病気としてどうしても見逃すことのできない病気が二つあった。結核と脳卒中である。

八千穂村の昭和三十三年度の国保疾患統計を見ると、国保加入者約六千人のうち、なんと入院では結核が第一位で二百五件（延べ人数）で、二位の精神病の七十三件を大きく離している。また人口千人あたりの結核患者数をみると、昭和三十年で十一人、昭和三十五年には二十人で、佐久管内では最も多かった。

そこで結核対策が村の急務とされたのだが、合併した八千穂村に、新しく保健婦として入っ

た井出今さんも、赤痢の問題が一段落した後、真先に結核に取り組んだ。当面したいちばんの問題といえば、結核の家族内感染だったという。

家の消毒でひどい目に

ある日、井出今さんは、一軒の家で三人も患者が出た家へ保健所といっしょに消毒に出掛けた。家を密封して徹底的にホルマリンで消毒するのである。赤痢の大発生で住民は消毒には慣れていたが、結核の消毒は大きかりでも嫌がられた。それに結核に罹患したことは他人には知られたくない。だから消毒にいくと、いつも家族から恨まれひどい目にあつた。

家族に「みなさん、消毒をするから外へ出てください」と言ったら、ちようどその時、その家の総領の息子と二番目の息子が来ていた。そして消毒が終わつたあと、井出今さんはその二人に強引に部屋へ閉じ込められてしまった。後でなんとか出してはもらったが、とても怖い思いをした。

そこで助役さんに、「こんなことでは、とても怖くて仕事ができないからもうやらない」と言つたところ、助役さんがその家まで行ってきて、「これは村としての仕事なのだから、保健所と村の衛生係に任せて貰わなければ困る」と家族を説得してくれた。それからその家は何も言わなくなったが、長い間そのしこりはとれなかつたという。

衛生指導員ができる前、各区には、衛生担当の衛生部長さんという組織がつくられていた。そして月に一回は役場へ集まって衛生部長会議というのを開いていた。これは村中から出ていたから、いろいろな点で保健婦と衛生部長さんとの連携はとれていた。

ともかく結核をなんとかしなければと、井出今さんは各地区を回って、一人ひとりに胸部エックス線検診の受診をすすめて回った。これには衛生部長さんも協力してくれた。受診率はたちまち上昇して遂に九八%に達し、これは佐久管内では第一位の成績となった。約十年の取り組みで結核患者は次第に下火になっていった。

これには、何といっても井出今さんの努力が第一だが、さらに当時の衛生主任の間島誠さんが、衛生部長組織をはじめ婦人組織など、全村の住民組織をいち早くつくり、それらをうまく利用したという点があげられよう。

布団の中はウジでいっぱい

もう一つの問題は、脳卒中である。当時最も多い病気といえば高血圧だったが、それが原因で脳卒中を起こす人が多く、家でねたきりが当たり前になっていた。

須田きみ子さんは、昭和二十七年から三十二年まで、村の畑八診療所に看護婦として勤めていた。午前は診療、午後は往診という日課だったが、ある日、長年ねたきりの病人の家族から

往診の依頼があり、診療所の大下先生と一緒に出掛けた。

家へ入るとなんだか変な匂いがする。寝ている病人の布団を取ってみると、陰部から異様な悪臭が漂ってきた。よく見るとウジ虫がいっぱい湧いていて、ハエが入り込んでいる。先生が火箸でウジ虫をはさんで出したら、中型のマッチ箱に一杯とれた。さらに尿でびっしょりと濡れていた布団を上げたら、布団の下の畳が腐り、またその下の床板まで腐っていた。

誰かが倒れると、一カ月ぐらいは家族は心配し、三日おきぐらいに往診の依頼があるが、これが二カ月、三カ月となると往診の依頼もなくなり、家族も全く面倒をみなくなる。その家も久しぶりの往診だった。

訪問しても門前払い

別な家へ行ったとき、褥瘡じよくそうに新聞紙が当ててあった。「どうして？」と聞くと、「どうしてって、何も無えだもの」という返事だった。「こんなことで、バイ菌がはいったらどうするの」と須田さんは怒ったが、「何も無え」というのは本当だった。

病人というものは、なるべく表へ出さず、人目につかない一番奥へ隠しておくというのが村では普通であった。それは農村のしきたりといってもよかった。とくに尿失禁があると、どうしても臭くなるので子どもも嫌がる。ときにはしんばり棒をかけて、戸が開かないようにして

おくこともあった。

だから保健婦や看護婦が訪ねて行っても、病人を見せてもらえない。ひどい場合は門前払いを食わされたうえ、「もう来なくもよい」と言われた家もあった。そういう家ほど病人の面倒をよくみていないのであった。

平成の今でも、これに似た話はなくもないが、当時はどこにでもみられた。農村の悲しい現実がそこにあった。

映画製作や農村調査に協力

配役はすべて寮人で

佐久病院と八千穂村が協力して教育映画「農村の病気」（製作・ファースト映画社）を製作したのは、昭和三十三年のことである。

この映画は、農村病の原因として若月院長（当時）が提案した、肉体的疲労、精神的緊張、栄養不足、冷え、不潔な環境という、農村に多い五つのストレス要因を解説し、それらをなくすことが農村病の予防に大切だということをテーマにしたものである。

従来の衛生教育といえば、せいぜいポスターやスライドで行うことが主だったので、初めての教育映画の製作には、村からも大きな期待が寄せられた。

舞台は八郡区が選ばれた。後に衛生指導員会長になった山浦虎吉さん、通称トラさんも、その製作に協力してもらった一人である。

トラさんは八郡区で商店を営んでいるが、衛生部長もやったことがあり、顔が広く地区の世話役的存在だった。そこで映画に出演する配役を選ぶ相談を受けた。今度の映画は、プロの俳優は出演せず、ナレーション以外はすべて村の人と佐久病院の職員でやることに決まっていた。トラさんは、自分のメモ帳から何人かの出演可能な人を選び出したが、その上、監督から頼まれて、自分自身も映画に出演することになった。

映画は、佐久病院の日向幸子総婦長（当時）が扮する村の保健婦が、自転車で山道を走っていく場面から始まる。目指すはトラさんの家。トラさんに赤ん坊が生まれたという設定である。産湯をつかう赤ちゃん。それをニコニコと嬉しそうに眺めるトラさん。若きトラさんの演技もなかなかのものだった。

真夏に冬の身支度で

撮影はリハーサル一回ですぐ本番だった。なにしろ赤ん坊は裸でいるのだから、カゼでも引

いたら大変である。そう時間をかけて何回も撮るわけにもいかない。

ところが撮影中にとんだハプニングが起こった。他の区から、「子どもが具合悪くなったから、保健婦さん至急来てくれ」と全村の有線放送が入ったのだ。村の保健婦役を演じた日向さんを本物の保健婦と間違えたらしい。撮影途中に抜け出すわけにもいかず、これには日向さんも大変困りはてた。

映画の中で、農家の食事風景を撮影する場面があつて、小林スイさんは、三人の子どもの母親役で出演した。

撮影したときは真夏の暑い日だったが、撮影は冬のシーンなので冬の身支度をしなければならなかった。衿元を何枚も出すために着物を何枚も重ね、その上に半てんを着て、その半てんに黒の袴をわざわざつけて、またその上にチャンチャンコを着る。その上何百ワットという電球で上から照らされているので、水玉のような汗が顔からしたり落ちる。それを病院の係が拭き拭き撮影した。

農家の「一升めし」を表現するために、茶わんに山盛りのご飯を食べるシーンもあった。監督が、「もっと高く、もっと高く」と言うので、茶わんに盛れるだけ盛ったところ、一番小さい娘は、茶わんに口を当てたときに、目から下は全く見えなくなってしまうた。これだけは、ちよっと演出のしすぎだったようである。

映画は半年がかりで完成し、村の各地区をまわって上映会が持たれた。特筆すべきは、これを機会に、佐久病院映画部が次々と自ら映画をつくるようになったことだろう。「冷えとたかかう」、「農民体操のすすめ」、「中気の老人たち」などの映画が続々とつくられたが、この「農村の病氣」製作が大きなきっかけになったといえる。

村の人との間に立つて

その頃佐久病院では、農村へ出掛けていろいろな調査をやるが多かった。それも多くは八千穂村が対象だった。「早老調査」もその一つである。

それより以前、若月先生が若い男女の性についての調査をやったこともあって、今度は「早老の調査」かと早合点した向きもあったようだが、そうではなく農村の人が都市の人に比べて、どのくらい早く老けているかの調査だった。八郡区と佐口区で行ったが、これもトラさんが面倒を見てくれた。

老け方といっても、外見上のことではなく、目の調節力（老眼の度合い）、関節可動度（肩、背骨、股関節の動く角度）、立幅跳び、肺活量、握力、背筋力などを測定して、総合して生理的年齢を出すというかなり科学的な分析であった。

年齢別に対象を選ばねばならぬので、これはトラさんに任せた。結果の分析では、農村は都